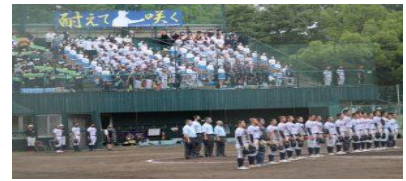




校長室だより 2022 年度 8 月号

Be creative !



「この4人がおらんかったら、なかったチームや」

山本監督の声が涙で揺れた・・・（中日新聞7／18付）

「敗れた日福大付。山本監督と部員たちが球場の敷地内で、3年生マネージャーを囲んだ。『この4人がおらんかったら、なかったチームや。』山本監督の声が涙で揺れた。マネージャーの藤澤和奏さん、日生菜々香さん、家入愛華さん、西田原未夢さん。選手に『走れ！』『声が出てない！』とハッパをかける役回り。家よりも球場や学校で過ごす時間が長く、『選手たちは家族のよう』。4人は一試合に一人ずつ全員のベンチ入りを目指し、かなわなかった。悔し涙をこらえつつも後輩にエールを送る。『マネージャーがチームを盛り立てて。選手は野球ができることに感謝し、一つでも多く勝ってほしい。』」



高校野球愛知県大会の2回戦、本校が小牧南高校に2-4で負けた翌朝、中日新聞に掲載された記事です。この2年半、彼女たちがどのような思いで頑張ってきたのか、改めて話を聞いてみました。

🏆 野球部のマネージャーを志した理由を教えてください。

藤澤さんと家入さんは「野球部のマネージャーになるためにこの学校を選び、入学しました。」ときっぱり。野球一家の中で育った藤澤さんの選択には最初から迷いはありませんでした。当初他校を希望していた家入さんは、中学3年生の時、山本監督と話をし、「自分がマネージャーをするならここだ！」と決めたとのこと。西田原さんはマネージャーという役割を果たしたいと思っていましたが、野球部と決めていたわけではないと言います。ただ、中学校時代の部活体験を振り返り、高校ではしっかりとした、人間的にも成長できる部活動の中で自分を鍛えたいと思ったと語ります。日生さんは、目的も含め高校選びをしていたその最中、山本監督と公開見学会で出会ったことが大きかったと言います。「高校に入学をして、何を目標にすればいいのか、そのことに目覚めた瞬間だった。」と彼女は語ります。彼女たちのマネージャー人生がこうして始まっていくことになります。



🏆 マネージャーとして一番印象に残っていることは？

4人は口を揃えて「あれしかない！」と言います。「あれ」というのは1学期のちょうど中間あたり、山本監督が厳しい表情で職員室に帰っていらっしゃったことがありました。ほどなくして野球部3年生が職員室の前にずらりと並びます。山本監督が「俺はな、心のないノックは打てんのだ。今日はもう話すつもりはない。」と言われた、その時に始まった出来事でした。いくつかのことを踏まえつつ迎えたラストミーティング。4人のマネージャーは「冷静ではいられなかった」とその時のことを思い出します。「これで終わっちゃうの・・・」「もう監督の指導を私たちは受けられないの」「私たちの目指してきたことはどうなるの」「どうして頑張ってきた私たちを見捨てるの？」不安と怒りと、様々な感情がないまぜになっていたと彼女たちは語ります。「野球がしたい！このままでは終われない！」背を向け、部屋を出る監督を、まず日生さんが追いかけます。藤澤さん、家入さん、西田原さんも心が先に駆け出す思いだったと言います。「もう一度、指導してほしい！一緒に夏の大会を迎えたい！このままで終わるわけに

はいかないのだ。」その一心で監督にしがみつ、自分たちと部員たちの思いを監督に心と行動で伝えました。山本監督にとっても忘れられない出来事になったことと思います。

🏆この2年半、どうしてこんなにがんばれたのだろうか

「どんな試合にも、どんな相手、それがたとえ強豪校あっても勝ちたいと思った」と家入さんは語ります。だから支えたかった。野球部は「ありがとう」がいっぱいつまった部活。その部員たちの思いに支えられたからこそ頑張れたという彼女たち。日生さんは「一言で言えばはまっちゃったのだと思う。何より、自分を支える生きがいが多かった。」「嫌なことや、がっかりすることもたくさんあった。でも、ここであきためたら負けだ。嫌なことも含めてみんな好きだった」と藤澤さん・西田原さん。顧問の先生、選手のみんなが大好きだった彼女たち。かけがえのない人との出会いがそこにはありました。

🏆自分自身が成長したと思うところはどんなところ？



いいお嫁さんになれる！これが彼女たちの第一声でした。

「ということは、旦那さんも教育できるってことね。」と私が付け足しました。だって、部員たちを叱咤激励してきた彼女たちです。きっと「良き母」にもなれるはず。西田原さんは「感性を育てることができた」と言います。ゴミが落ちていて、じ

ゃあ、拾おう。周りの人を見て、「あの人が元気がないなあ、落ち込んでいるなあ。」こんなふうに環境を整えたら、こんなふうに働きかけをしたら、もっと生活がよくなるのではないかと考える習慣ができたとのこと。将来、看護師になろうとしている自分にとってはとても大切な力だと彼女は言います。家入さんも「視野が広がったということと、周りを観察する力が身についた。」と言います。部活だけではなく、日常の学校生活でも体調が悪い人や落ち込んでいる人にいち早く気づくことができる、そして手を差し伸べる力がついたと言います。藤澤さんは「解決する力だ。」と言います。チームはいつもいい状態ではありません。「チームの雰囲気が悪いなあ。じゃあ、こうしたらどうか。」悪い状態から少しでもいい方向へ改善をしていく、ほったらかしの状態にせず、前進をしていく、そのためにどうしたらいいかを考える力を育てることができたと言います。日生さんは「確実に大人になった。」と言います。「みんなが言ったように、視野も広がった、物ごとに気づく力も身についた。入学前の自分を今の自分が見たら、確実に成長したと自信を持って言える。これが『大人になる』ということなのだと思う。」本当にその通りですね。自分が持つ弱さもしっかりと自覚しつつ、その中で、自分の良さを確認できる力を持っていること、4人は大人への階段を自分の意思で着実に上ろうとしています。

🏆野球部の未来に一言 感謝の気持ちを忘れずに！

「みんな大好き！と伝えたい。そうでなかったら私たちの活動は続かなかった。」と彼女たちは声を揃えます。「ふがない私たち3年生のために一緒に叱られることになってしまった2年生には特に苦勞をかけた。一緒に歩いてきてくれてありがとうとお礼を言いたい。」どの学校の野球部よりも人一倍練習をしてきた、そのことにうんと自信を持ってほ



しいと彼女たちは言います。「自分たちはやれる、できる、そのために練習をしてきたことに確信をもってほしい。素晴らしい監督・顧問のもとで、ちゃんとした野球を教えてもらえる、その環境を当たり前と思わず、感謝の心を忘れない、そして一つでも多くの勝利を手にする、自分たちの持ち味をいつも発揮できる部であり続けてほしい。」これが彼女たちのエールです。マネージャーの皆さん、2年半、お疲れ様でした。マネージャーとしての魂は2年生マネージャーに確実に受け継がれていると彼女たちは誇らしげです。これからも頑張れ！福祉大付野球部！

*「今月の言葉」はお休みします。